

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	藤井 進
<p>[ 論文題名 ]</p> <p><b>Infectious Disease during Hospitalization is the Major Causative Factor for Prolonged Hospitalization: Multivariate Analysis of Diagnosis Procedure Combination (DPC) Data of 20,875 Cases in Japan</b></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>Journal of Clinical Biochemistry and Nutrition (in press)</p> <p>著者名</p> <p>Susumu Fujii, Megumi Hara, Sayuri Nonaka, Shinichiro Ishikawa, Yosuke Aoki, Keizo Anzai, Shigeki Morita, Kazuma Fujimoto, Masaaki Mawatari</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的】大規模医療情報の集積が進むなか、その利活用が求められている。また政策の地域完結型医療においては、計画的な連携を可能とする為に入院の長期化は問題となる。そこでデータを利活用し、その要因分析を行った。</p> <p>【方法】佐賀大学病院の2012年4月から2015年2月の20,869症例のDPCデータを用い、有意に在院日数が長いとされる期間3を超えた症例を長期化症例とした。年齢、性別、緊急入院、救急車の利用の有無、ECU・ICUの利用日数、糖尿病の有無、入院時の感染症の有無、入院後の感染症の有無を単変量解析、並びに多変量解析を用いて要因分析を行った。また入院後の感染症発生の有無で2群に分け、同様に要因分析を行った。</p> <p>【結果】長期化する要因は単変量解析とロジスティクス回帰分析で、年齢、ICU、糖尿病有、入院後の合併症で有意差が認められ、とりわけ入院後の感染症がオッズ比で2.89となった。入院後の感染症発生要因は単変量解析で、年齢、緊急入院、救急車有、ECU,ICU,糖尿病有に有意差があったが、ロジスティクス回帰分析では、年齢ICU,糖尿病有に有意差があった。</p> <p>【考察・結論】入院が長期化する要因には入院後の感染症が関係し、高齢者においてそのリスクが高い。また糖尿病の罹患が関係している。今後の高齢化社会においては、これらリスク背景が高まることが予想され、入院を長期化させない対策が必要と考える。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	南里 麻己
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Differential effects of adipose tissue stromal cells on the apoptosis, growth and invasion of bladder urothelial carcinoma between the superficial and invasive types (邦題：脂肪組織間質細胞が表在性及び浸潤性膀胱癌の生存、増殖、浸潤におよぼす影響)</p> <p>雑誌名，巻（号のみの雑誌は号），頁一頁，発行西暦年 International Journal of Urology in press</p> <p>著者名 Kawasaki-Nanri, Maki; Aoki, Shigehisa; Uchihashi, Kazuyoshi; Yamamoto, Mihoko; Udo, Kazuma; Nishijima-Matsunobu, Aki; Kakihara, Nahoko; Noguchi, Mitsuru; Uozumi, Jiro; Toda, Shuji 南里 麻己・青木 茂久・内橋 和芳・山本 美保子・有働 和馬・西島 亜紀・ 柿原 奈保子・野口 満・魚住 二郎・戸田 修二</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>研究の目的：</b>癌-間質細胞相互作用は、癌生物学の中心課題の一つである。膀胱筋層間や漿膜下層には、間葉系幹細胞（MSC）を含む脂肪組織間質細胞（ATSC）が存在するが、それらが膀胱癌に与える影響については不明である。今回、膀胱癌-脂肪組織間質細胞相互作用を検討した。</p> <p><b>方法：</b>脂肪組織から単離した ATSC を包埋したコラーゲン・ゲル層上に膀胱癌細胞株（表在型尿路上皮癌（UC）：RT4、浸潤型 UC：EJ）を播種し混合培養した。細胞動態を免疫染色、Western blot、RT-PCR にて、浸潤をゲル内浸潤にて評価した。</p> <p><b>結果：</b>ATSC は、表在型 UC の増殖を抑制し、アポトーシスを促進したが、浸潤型 UC では、増殖を促進し、アポトーシスを抑制した。ATSC は、表在性・浸潤性 UC とともに MAPK pathway の発現を亢進した。それぞれの細胞における MAPK pathway の役割が相反することが示唆された。UC の ATSC の分化に及ぼす影響では、表在型 UC では、ATSC の myofibroblast への分化、浸潤型 UC は、preadipocytes への分化をそれぞれ促進した。</p> <p><b>結論：</b>ATSC は表在型 UC の進展抑制因子であり、浸潤型 UC の進展促進因子であることが示唆される。また、ATSC 誘導性の MAP kinase pathway は、表在型 UC と浸潤型 UC では異なる役割を果たしていることが示唆される。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的，方法，結果，考察，結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	錦戸 利幸
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Deletion of AIM/CD5L attenuates the inflammatory response and infarct size in acute myocardial infarction</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of the American Heart Association. 2016, Article in Press</p> <p>著者名 Toshiyuki Nishikido, Junichi Oyama, Aya shiraki, Hiroshi Komoda, Koichi Node</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>[ 目的 ] 急性心筋梗塞後の TLR-4 受容体を介した過剰な炎症反応は心筋障害を促進する。一方、動脈硬化巣におけるマクロファージから産生・分離される Apoptosis inhibitor of macrophage(AIM)は脂肪細胞を融解して遊離脂肪酸 (FFA) を放出させることで TLR-4 受容体を介した炎症反応を惹起することが示された。それゆえ、本研究では AIM による急性心筋梗塞後の炎症反応の惹起性と心筋傷害への影響を明らかにする。</p> <p>[ 方法 ] 野生型マウス、AIM 欠損マウスに対して冠動脈結紮によって心筋梗塞を作成し、心筋梗塞発症 3 日後の炎症反応と梗塞サイズを測定比較した。また、発症 28 日後に心重量測定、心臓超音波、組織染色によって心筋リモデリングを評価した。</p> <p>[ 結果 ] AIM 欠損マウスは梗塞サイズが有意に減少し、血中 FFA、TLR-4 受容体を介した NF<math>\kappa</math>B 活性、好中球の浸潤、活性酸素の減少を認めた。また、野生型よりも超音波では有意な心拡大は抑制されないものの収縮能は維持され、梗塞後の心重量増加や心筋線維化が有意に抑制された。</p> <p>[ 結論 ] AIM 欠損は心筋梗塞後の梗塞巣と炎症反応を減少し、心筋リモデリングを抑制した。この結果は、AIM を標的とした急性心筋梗塞後の治療開発によって心筋傷害を減少し、以後の心不全発症を抑制することを期待させるものである。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	川久保 洋晴
<p>[ 論文題名 ]</p> <p><b>Upper Gastrointestinal Symptoms Are More Frequent in Female than Male Young Healthy Japanese Volunteers as Evaluated by Questionnaire.</b></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of Neurogastroenterology and Motility, Vol 22, No 2, 248-253, 2016</p> <p>著者名 Hiroharu Kawakubo, Yuichiro Tanaka, Nanae Tsuruoka, Megumi Hara, Koji Yamamoto, Hidenori Hidaka, Yasuhisa Sakata, Ryo Shimoda, Ryuichi Iwakiri, Motoyasu Kusano and Kazuma Fujimoto (川久保洋晴、田中雄一郎、鶴岡ななえ、原めぐみ、山本甲二、樋高秀憲、坂田資尚、下田良、岩切龍一、草野元康、藤本一眞)</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【背景／目的】 一般外来において成人では男性に比べ女性で臨床症状を多く訴える印象があり、実際本邦での年齢階級別にみた有訴者率は 20 歳代を境に女性の割合が高い。上部消化管内視鏡検査にて器質的疾患を認めない若年者においても同様の傾向があるかを調査した。</p> <p>【対象】 期間：2007 年～2013 年、対象：佐賀大学医学部学生健康ボランティア 581 名 (22～30 歳)、方法：上部消化管内視鏡検査、アンケート (Frequency Scale for the Symptoms of GERD : FSSG)、ヘリコバクターピロリ尿中抗体測定</p> <p>【評価方法】 FSSG の各項目に対する回答 0 点から 4 点のうち、2 以上 (時々、しばしば、いつも) を陽性とし、症状の有無と性別を <math>\chi^2</math> 検定で解析した。FSSG の各項目に対し、1 項目以上陽性所見を認めた対象について、酸逆流関連症状と運動不全症状について t 検定で解析した (SPSS 使用)。</p> <p>【結果】 ヘリコバクターピロリ非感染者かつ上部消化管内視鏡検査にて器質的疾患のない若年者において、女性により多く症状の訴えを認めた。症状について酸逆流関連症状では男女差は認めなかったが、運動不全症状項目については女性により多くの訴えを認めた。</p> <p>【まとめ】 今回の検討では器質的疾患を認めない若年者でも女性により多くの上部消化管症状があることが示された。男女の訴えの差が FD 有病率と関連している可能性がある。</p>			

備考 1 論文要旨は、600 字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	田代 宏樹
<p>[ 論文題名 ]  Interleukin-33 from monocytes recruited to the lung contributes to house dust mite-induced airway inflammation in a mouse model</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年  PLOS ONE</p> <p>著者名  Hiroki Tashiro, Koichiro Takahashi, Shinichiro Hayashi, Go Kato, Keigo Kurata, Shinya Kimura, Naoko Sueoka-Aragane</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的】IL-33は気管支喘息発症・難治化に関与し、気道上皮細胞に由来すると報告されている。我々はcirculating monocyte由来IL-33の気道炎症における役割を明らかにするために本研究を行った。</p> <p>【方法】House dust mite (HDM) 誘導性気道炎症モデルを用い、気管支肺胞洗浄液、肺組織サイトカイン濃度・肺組織免疫染色で評価した。肺組織から分離したmonocyteの免疫蛍光二重染色、IL-33濃度、表現型をflow cytometryで解析した。circulating monocyteを欠失させる目的でclodronate liposomeを投与し、サイトカイン産生および肺組織免疫染色を行った。</p> <p>【結果】HDM群ではコントロール群に比較し肺内IL-33が上昇し、肺組織の免疫染色でIL-33陽性細胞は気管支・血管周囲に多く認められた。免疫蛍光二重染色でIL-33陽性細胞はmonocyte markerと共発現し、IL-33陽性monocyteはLy6cが高発現していた。clodronate liposomeを処理したHDMマウスではIL-33上昇が抑制され、気道炎症・気道抵抗およびTh2サイトカイン産生が抑制された。</p> <p>【考察・結論】Circulating monocyte由来IL-33はHDM誘導性気道炎症に寄与している。今後monocyteをターゲットとした治療開発が望まれる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	森 啓輔
<p>[ 論文題名 ] Effects of ZD0947, a novel and potent ATP-sensitive K<sup>+</sup> channel opener, on smooth muscle-type ATP-sensitive K<sup>+</sup> channels</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 European Journal of Pharmacology in press</p> <p>著者名 Keisuke Mori, Yoshio Yamashita, Noriyoshi Teramoto</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的】 K<sub>ATP</sub>チャネルは細胞内 ATP により抑制され、ADP により活性化される ATP 感受性 K<sup>+</sup>チャネルであり、細胞内代謝と相関し生理的に重要な役割を果たす。また K<sub>ATP</sub>チャネルは Kir6.X と SURs から構成され、SUR1/Kir6.2 は膵臓のβ細胞に、SUR2A/Kir6.2 は心筋に、SUR2B/Kir6.2 は平滑筋に主に発現する。それらは類似の電気生理学的な性格を持つが、K<sub>ATP</sub>チャネル開口薬には異なる反応を示す。本研究では ZD0947 の K<sub>ATP</sub>チャネルに対する薬理作用を検証した。</p> <p>【方法】 GFP、SUR1/Kir6.2、SUR2A/Kir6.2、SUR2B/Kir6.2、SUR2B/Kir6.1 を組み合わせて遺伝子導入試薬により共発現させた HEK293 細胞に対して電気生理学的手法を用い検証した。</p> <p>【結果】 HEK293 細胞に発現させた其々の K<sub>ATP</sub>チャネルに対して ZD0947 は異なる作用を示した。SUR1/Kir6.2 や SUR2A/Kir6.2 に対しては抑制作用を、SUR2B/Kir6.2 に対しては活性化作用を示した。また Kir6.X のみでチャネルを構成する Kir6.2 Δ C26、Kir6.2 Δ C26C166A に対してはほとんど作用しなかった。</p> <p>【考察・結論】 ZD0947 は発現している K<sub>ATP</sub>チャネルの種類により薬理作用が異なり、それはチャネルを構成している SURs に依存していることが示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	板村 英和
<p>[ 論文題名 ]  The MEK Inhibitor Trametinib Separates Murine Graft-versus-Host Disease from Graft-versus-Tumor Effects</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  JCI insight. 2016. in press</p> <p>著者名  Hidekazu Itamura, Takero Shindo, Isao Tawara, Yasushi Kubota, Ryusho Kariya, Seiji Okada, Krishna V. Komanduri, Shinya Kimura</p> <p>[ 要 旨 ]  目的: 同種幹細胞移植における移植片対宿主病(GVHD)に対し、MEK 阻害剤 trametinib の T 細胞受容体シグナル抑制を介した選択的免疫抑制効果を主にマウスモデルで検証した。</p> <p>方法: 複数のマウス GVHD モデルに対し vehicle / trametinib を投与し、その免疫抑制効果を解析した。</p> <p>結果: GVHD 発症群と比較し trametinib 投与群で有意に生存が延長し GVHD 症状を軽減した。病理組織(大腸・皮膚)でも GVHD 所見が軽減した。  腫瘍細胞株 P815 を輸注した Graft versus tumor(GVT)効果についての解析では、T リンパ球非輸注群では早期に腫瘍死する一方で、T リンパ球輸注群ではドナーT リンパ球の P815 に対する GVT 効果に伴って生存が延長するが、trametinib 投与ではさらに生存の延長を認めた。加えて GVHD 症状も trametinib 投与群では軽減された。また実臨床で用いられている免疫抑制剤である tacrolimus 群との比較では tacrolimus 群では GVT 効果が減弱ないしは不十分である一方、trametinib 投与群では GVT 効果の温存を認めその優位性が示された。</p> <p>考察: 複数のマウスモデルの結果より、trametinib は選択的に GVHD を抑制する一方で、腫瘍特異的 T 細胞には影響を及ぼさず、既存の薬剤と比較しても有意に GVT 効果を温存することが示された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	村上(旧姓 野口) 亜紀子
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Changes in uncuffed endotracheal tube leak during laparoscopic inguinal herniorrhaphy in children</p> <p>Journal of Anesthesia, 30(4), 702-706, 2016</p> <p>Akiko Noguchi, Kumiko Kuga, Naoki Tashiro, Yusuke Shimakawa, Takeshi Shono, Naomi Hirakawa, Yoshiro Sakaguchi</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【研究の目的】</b> 小児用カフなし気管チューブの問題点である腹腔鏡手術時のチューブリーク(気管チューブ周囲からのエアリーク)について、その経時的変化を前向きに調査した。</p> <p><b>【方法】</b> 1-6歳までの腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術(体位は頭低位)施行患者31名を対象に、術中のチューブリーク[(吸気1回換気量-呼気1回換気量)/吸気1回換気量]×100(%)を人工呼吸開始後(ベースライン)、手術開始前、気腹時および手術終了後に測定した。また、リーク圧(チューブリーク音が発生する最小気道内圧)も同時に測定した。</p> <p><b>【結果】</b> チューブリークは気腹時に有意に減少した。リーク圧は気腹時および手術終了後に有意に上昇した。</p> <p><b>【考察】</b> チューブリークは気腹時の気道内圧上昇に伴って増加すると考えられていたが本研究では減少した。それは、<b>気腹による腹圧上昇および頭低位→気管の解剖学的形態変化→リーク圧上昇→チューブリーク減少</b>というメカニズムが推測された。気腹時のリーク圧上昇によって気道粘膜損傷のリスクが高まるため、術中にカフ圧調整が可能なカフ付き気管チューブを使用する方が安全である可能性が示唆された。</p> <p><b>【結論】</b> カフなし気管チューブを用いた小児腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術における今回の研究では、気腹時の有意なチューブリーク減少およびリーク圧上昇という結果を得た。本研究結果の再現性および臨床的意義を検討するため、さらに進んだ研究が必要である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	野口 宣人
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Factors Associated with Nursing Activities in Humanitarian Aid and Disaster Relief</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>PLOS ONE, Mar 9;11(3):e0151170. doi: 10.1371/journal.pone.0151170. eCollection 2016.</p> <p>著者名</p> <p>Noguchi N, Inoue S, Shimanoe C, Shibayama K, Shinchi K.</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>背景と目的</b> 看護師は人道支援や災害救援活動において重要な役割を果たしている。しかし、実際どのような看護活動を行っているのかほとんど知られていない。本研究では、人道支援・災害救援活動で行う看護活動を明らかにし、看護活動に影響する要因を検証することである。</p> <p><b>方法</b> 海外で人道支援・災害救援活動の経験を有する147名の日本人看護師に自記式質問紙調査を行った。調査内容は、基本属性、過去の経験（災害医療のトレーニング受講回数、人道支援・災害救援活動の派遣回数）、人道支援・災害救援活動参加時の状況（派遣チームの規模、災害の種類、発災後の経過時期、活動期間）、看護活動の頻度である。看護活動の頻度は5段階で評価し“看護活動スコア”とした。看護活動スコアに影響する要因はロジスティクス回帰分析を用いて解析した。</p> <p><b>結果</b> 看護師は27種類の看護活動を実施しており、そのうち10種類の頻度が高かった。看護活動スコアへの影響要因は、看護師資格が正看護師であること（OR 7.79, 95%CI 2.95-20.57）、災害医療のトレーニング受講回数が2回以上であること（OR 2.90, 95%CI 1.12-7.49）、発災後の経過時期が3週間以上であること（OR 8.77, 95%CI 2.59-29.67）であった。</p> <p><b>結論</b> この結果は、看護活動の質を向上させる上で、エビデンスに基づいた災害医療トレーニングの構築に寄与するだろう。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	西田 有毅
<p>[ 論文題名 ] Preclinical activity of the novel B-cell-specific Moloney murine leukemia virus integration site 1 inhibitor PTC-209 in acute myeloid leukemia: Implications for leukemia therapy</p> <p>Cancer Science, 106 卷 (号のみの雑誌は号), 1705-1713, 2015</p> <p>著者名 Yuki Nishida, Aya Maeda, Dhruv Chachad, Jo Ishizawa, Yi Hua Qiu, Steven M. Kornblau, Shinya Kimura, Michael Andreeff and Kensuke Kojima</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>目的</b> : 急性骨髄性白血病 (AML) は白血病幹細胞を起源とする治癒困難な血液悪性腫瘍である。我々は AML 幹細胞に強く発現する B 細胞特異的モロニーマウス白血病ウイルス挿入部位 1 (BMI-1) が AML の新規治療標的となるかを検討した。</p> <p><b>方法</b> : 511 名の新規に診断された AML 患者細胞における BMI-1 タンパク発現を逆相タンパクアレイ (RPPA) で測定し、予後との関連を調べた。次に、BMI-1 阻害剤 PTC-209 の AML 細胞株及び患者細胞におけるアポトーシス誘導効果を調べ、患者細胞においては AML 幹細胞を含む CD34<sup>+</sup>CD38<sup>low/-</sup>における効果も検討し、更に PTC-209 による BMI-1 の低下とアポトーシス誘導の関連性も検討した。</p> <p><b>結果</b> : RPPA の結果、BMI-1 発現は予後不良の染色体異常を持つ患者において最も高く、BMI-1 が高い患者は有意に全生存期間が劣った。PTC-209 は AML 細胞株の BMI-1 タンパクレベルを減弱し、ミトコンドリアを介したアポトーシスを誘導した。患者 AML 細胞において PTC-209 は濃度依存性にアポトーシスを誘導し、CD34<sup>+</sup>CD38<sup>low/-</sup>細胞は CD34<sup>-</sup>細胞と比してより感受性が高く、CD34<sup>+</sup>細胞では BMI-1 の低下はアポトーシスの程度を反映した。</p> <p><b>結論</b> : BMI-1 高発現は AML の予後不良因子であり、BMI-1 阻害は AML 幹細胞を駆逐する新たな治療戦略となり得る。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	松田 憲亮
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Factors influencing executive functions by physical activity level among young adults : a near-infrared spectroscopy study.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of physical therapy science, in press</p> <p>著者名 Kensuke Matsuda, Shou Ikeda, Tsubasa Mitsutake, Masami Nakahara, Yoshiharu Nagai, Takuro Ikeda, Etsuo Horikawa</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的】 認知症の予防的観点から早期介入の必要性は高く、介入の視点として若年成人期の認知機能に対する関連要因の検討は重要である。同時に実際の脳活動を検証し、関連要因の影響を検討する意義は大きいと考える。本研究の目的は若年成人期の認知機能スコアに影響する因子の検討と身体活動レベルによる実行機能の活動性の違いを検討することである。</p> <p>【方法】 健常大学生 40 名を認知機能スコアによって、認知機能 HIGH 群と LOW 群に編成した。BMI、知能指数、身体活動、ライフスタイル等について 2 群間の比較検討を行い、認知機能スコアの関連要因を分析した。また歩数により対象者を高、中、低の 3 つの身体活動レベルに分け、ストループ課題と近赤外分光法を用いて、実行機能関連領域の活動性について比較検討した。</p> <p>【結果】 若年成人期の認知機能スコアへの影響因子として、全知能指数 (FIQ) と歩数が抽出された。ストループ課題中の実行機能関連領域 Oxy-hemoglobin 濃度は、身体活動低群と比較して高群で有意に増加した。</p> <p>【考察および結論】 本研究の結果、若年成人期の認知機能に関連する要因として、FIQ と歩数が示された。また、身体活動高群では実行機能関連領域の活動性が有意に高く、身体活動の重要性が示唆された。高い身体活動は脳活動、血管新生や神経新生に関与すると報告されており、若年成人期においても注目すべき要因の 1 つであると考えられる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	荒木 薫
<p>[ 論文題名 ]  <b>Estimating rotavirus vaccine effectiveness in Japan using a screening method</b></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  <b>Human vaccines and immunotherapeutics 12(5) 1244-9 2016</b></p> <p>著者名 <b>Kaoru Araki, Megumi Hara Yuta Sakanishi, Chisato Shimano, Yuichiro Nishida, Muneaki Matsuo, Keitaro Tanaka</b></p> <p>[ 要 旨 ] 【研究の目的】日本では 2011 年よりロタウイルス (RV) ワクチンが任意接種として使用開始となったが、これらの一般集団における接種割合や有効率の報告はまだない。本研究の目的はワクチン導入後の RV ワクチンの接種割合と有効性を評価することだ。</p> <p>【方法】研究デザインは Case Population Study (スクリーニング法) である。2011/12 及び 2012/13 シーズンに、佐賀県内の協力医療機関 6 施設で、RV 迅速検査を受けた 2011 年 8 月～2013 年 6 月生まれの乳幼児の検査結果およびワクチンの接種状況等の情報を収集した。また、ワクチンの出荷数と人口動態統計による出荷期間の出生数から、集団のワクチン接種割合を算出した。<math>Vaccine\ effectiveness\ (VE) = (PPV - PCV) / \{PPV(1 - PCV)\}</math> PPV: 対象集団の中でワクチンを接種していた割合、PCV: 症例の中でワクチンを接種していた割合 より有効率を推計した。</p> <p>【結果】佐賀県の PPV は承認からの時間経過と共に上昇し、研究期間中の佐賀県の PPV は 14.9%であった。また小城市の PPV は県と比較し全期間で約 2 倍高い傾向であった。2012/13 シーズンは、急性胃腸炎患者 190 名中 79 名が RV 胃腸炎と診断され、4 名がワクチンを接種していた。PCV5.1%、VE69.5%と推計された。</p> <p>【考察, 結論】ワクチンの接種率は承認からの時間経過とともに上昇し、助成があると約 2 倍高かった。スクリーニング法による有効率は 69.5%と既知の国内試験による有効率より低めに算出された。これらは対象者の保健行動や基礎疾患等の交絡要因の考慮はなく、現在は症例対照研究による評価を行っている。</p>			

備考 1 論文要旨は、600 字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第13624003号	氏名	上野 雅也
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Silver-containing Hydroxyapatite Coating Reduces Biofilm Formation by Methicillin-resistant <i>Staphylococcus aureus</i> <i>In Vitro</i> and <i>In Vivo</i></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 BioMed Research International in press</p> <p>著者名 <u>Masaya Ueno</u>, Hiroshi Miyamoto, Masatsugu Tsukamoto, Shuichi Eto, Iwao Noda, Takeo Shobuike, Tomoki Kobatake, Motoki Sonohata, Masaaki Mawatari</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【研究の目的】 我々はこれまでにインプラント自体に抗菌性を持たせるため銀含有ハイドロキシアパタイト (銀 HA) 溶射技術を開発し研究してきた。近年菌が作成するバイオフィルムが感染に関与し治療抵抗性を増し重篤化させているという報告が多く行われているため、今回銀 HA のメチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)へのバイオフィルム形成阻害能について検討した。</p> <p>【方法】 0%、0.5%、1.0%、3.0%の割合で銀を添加した HA を直径 14mm の純チタン板表面に溶射し試験片を作製した(HA、0.5%銀 HA、1.0%銀 HA、3.0%銀 HA)。37℃牛血清中で MRSA を接種し7、14 日間流動状態で培養、バイオフィルムを蛍光染色し、バイオフィルム被覆率(BCR)を測定した(<i>in vitro</i>)。またラット皮下に試験片(HA、3.0%銀 HA)を挿入し MRSA を接種、1、3、7 日後に摘出、蛍光染色し BCR を測定した(<i>in vivo</i>)。</p> <p>【結果】 <i>in vitro</i> 実験で銀 HA の BCR は期間中 HA よりも有意に低く、銀濃度が上がるにつれて BCR が小さくなることを確認した。<i>in vivo</i> 実験においても同様に銀 HA は HA よりも BCR が有意に低かった。また、銀の副作用として知られる銀皮症は銀 HA 移植部直上においても見られなかった。</p> <p>【考察】 銀 HA は濃度依存性に MRSA のバイオフィルム形成を阻害し、3.0%であれば銀によって皮膚障害が誘発されることなくバイオフィルム形成阻害能を示す事ができる。</p> <p>【結論】 銀 HA の使用により MRSA のバイオフィルム形成が阻害されるので、インプラントを用いた治療において術後感染・治療への抵抗性を減少させることが期待できる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	釘本とよ子
<p>[ 論文題名 ]</p> <p><b>Bad news を伝えられたがん患者の配偶者における心理的ストレス反応と健康関連 QOL の相関についての研究</b></p> <p><b>Significance of Psychological Stress Response and Health-Related Quality of Life in Spouses of Cancer Patients When Given Bad News</b></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年 Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing (accepted on Dec 14, 2016)</p> <p>著 者 名 釘本 とよ子, 香月 亮, 小杉 寿文, 大田 明英, 佐藤 英俊</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【目的】</b>本研究の目的は, bad news を伝えられたがん患者の配偶者の3つの告知時期(病名告知時・再発告知時・終末告知時)における心理的ストレス反応の程度, その影響要因, 健康関連 QOL を測定することにより, 配偶者の健康状態を明らかにすることである.</p> <p><b>【対象と方法】</b>3つの告知時期に該当する配偶者 203 名 (男性 57 名, 女性 146 名) に対し, 心理的ストレス反応測定尺度・夫婦関係満足尺度・健康関連 QOL 尺度を用いた自記式質問紙票による調査を行った.</p> <p><b>【結果】</b>心理的ストレス反応の程度は, 終末告知時が高く, ついで病名告知時, 再発告知時であった. その影響要因は, 告知時期によって異なっていた. 健康関連 QOL は3つの期間で有意差を認めなかったが, 国民標準値と比較すると告知時期別に有意差を認める項目があった.</p> <p><b>【結論】</b>心理的ストレス反応が最も高くなる終末期の告知に際しては, 患者だけでなく配偶者に対しても健康関連 QOL に配慮したケアが必要である.</p>			

- 備考 1 論文要旨は, 600字以内にまとめるものとする。
- 2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	藤原 信治
<p>[ 論文題名 ]  Association between Blood Pressure Lowering and Quality of Life by Treatment of Azilsartan</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  International Heart Journal, In press.</p> <p>著者名  <u>Nobuharu Fujiwara, MD, Atsushi Tanaka, MD, PhD, Atsushi Kawaguchi, PhD, Motoko Tago, MD, Jun-ichi Oyama, MD, PhD, Yasufumi Uchida, MD, PhD, Kazuo Matsunaga, MD, PhD, Kazuo Moroe, MD, PhD, Shigeru Toyoda, MD, PhD, Teruo Inoue, MD, PhD, Hideo Ikeda, MD, PhD, and Koichi Node, MD, PhD.</u></p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【研究の目的】  高血圧の長期管理には、良好な服薬アドヒアランスを維持することが重要である。その服薬アドヒアランスに影響する因子として、健康関連 QOL (HR-QOL) が挙げられるが、降圧強化療法による HR-QOL への影響は不明である。そこで、従来のアンジオテンシン II 受容体拮抗薬 (ARB) にて降圧不十分例に対して、同クラス内で降圧効果が高いアジルスルタンへの切替えによる血圧および HR-QOL への影響を評価することが目的である。</p> <p>【方法】  従来の ARB 治療で目標血圧未到達の 147 例 (女性 83 例, 73±15 歳) に対して、アジルスルタンへの切替えの 3 ヶ月後における血圧の変化量、及び EuroQOL5 項目法 (EQ5D), ピッツバーグ睡眠の質指数 (PSQI), 老年期うつ病評価尺度 (GDS), 簡易更年期指数 (SMI) などの HR-QOL 指標への影響を解析した。</p> <p>【結果】  血圧は 151±16/82±12mmHg から 134±17/73±12mmHg へ有意に低下した。また、GDS (全体) と PSQI (女性のみ) は有意に改善し、GDS の改善は収縮期血圧の低下と有意な正相関を示した。また、登録時の各 HR-QOL 指標が不良群において、切替えによりいずれの指標も有意に改善した。</p> <p>【考察】  ARB の切替えによる降圧強化療法は、HR-QOL を悪化させず、患者背景によりその影響は一部異なるものの HR-QOL を有意に改善した。その詳細な作用機序や、HR-QOL への長期的な影響は不明であるが、適切な降圧療法の妥当性を HR-QOL の観点から支持するものである。</p> <p>【結論】  降圧目標未達成患者における降圧強化療法は、一部の HR-QOL 指標を改善する。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	小網 博之
<p>[ 論文題名 ]</p> <p><b>Haptoglobin Reduces Inflammatory Cytokine INF-<math>\gamma</math> and Facilitates Clot Formation in Acute Severe Burn Rat Model</b></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>Journal of Nippon Medical School, in press</p> <p>著者名</p> <p>Hiroyuki Koami, Yuichiro Sakamoto, Taku Miyasho, Ryo Noguchi, Norio Sato, Keita Kai, Kosuke Chris Yamada, Satoshi Inoue</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【目的】</b> ハプトグロビン(Hpt)は大量溶血に伴う血尿を改善し腎保護作用があることが示されているが、他の効果に関する報告は乏しい。本研究では、ラット重症熱傷モデルを用いてハプトグロビンの抗炎症作用ならびに凝固線溶系に対する効果を解析した。</p> <p><b>【方法】</b> 約 30%の全層熱傷モデルを作成した 6 週齢の SD ラットを、生理食塩水投与群(n=10)、低用量ハプトグロビン投与(L-Hpt)群(80U/kg; n=10)、高用量ハプトグロビン投与(H-Hpt)群(400U/kg; n=10)の 3 群に分けた。各群 6 時間(n=5)ならびに 24 時間後(n=5)に、尿・血液・各臓器(肺・肝・腎)を採取した。検討項目として、血尿の程度や各炎症サイトカイン(Bio-Plex)、各凝固能検査や thromboelastometry (ROTEM)を用いた全血凝固能検査、病理学検査を行った。</p> <p><b>【結果】</b> ハプトグロビンは 24 時間後の遊離 Hb を低下させ血尿も改善させた。また、各炎症性サイトカインの中でも特に INF-<math>\gamma</math> を低下させた。凝固能ではハプトグロビン投与により血栓硬度を増加させ、血栓形成速度を有意に促進させた。臓器保護効果は認められなかった。</p> <p><b>【考察】</b> 血尿を伴う重症熱傷に対してハプトグロビンは、抗炎症効果に加えて、凝固促進効果を示した。臓器障害に対する保護作用は、急性期の検討であり認められなかった。</p> <p><b>【結論】</b> ハプトグロビンは急性期のラット重症熱傷モデルにおいて INF-<math>\gamma</math> を低下させ、血栓形成を促進させた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	木村 孝
<p>[ 論文題名 ] Discrimination of hie and hiesho using toe blood pressure in young women</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of Integrative Medicine, in press</p> <p>著者名 木村 孝 浅見 豊子</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【目的】</b> 自覚的な不安定愁訴の一つと考えられている「冷え」は、緊急対応が必要な場合や他の疾患診断に至る場合があり、また多くの女性が健康被害や QOL に影響を受けている。さらに急性動脈閉塞のような緊急対応が必要な場合や甲状腺機能低下症など疑われないと診断に至らないこともあり、「冷え」を鑑別することが必要である。 本研究では、四肢末梢循環の血流量の側面から、主観的評価に加えて客観的評価から「冷え」症状の定量化を目的とする。</p> <p><b>【方法】</b> 対象は、「冷え」をもたらす基礎疾患を有しない健康な若年女性 159 名とした。測定には、質問票、血流脈波測定機器を使用して測定した。分析には、探索因子分析後判別分析、クラスタ分析後多変量ロジスティック回析、2 群間検定は <math>\chi^2</math> 乗検定、3 群間検定は Kruskal-Wallis 検定、Scheffe の多重比較を用いた。</p> <p><b>【結果】</b> アンケート結果と寺澤診断基準と比較した結果、自覚症状がある 55 名 (67.9%)、自覚症状なし 15 名 (19.2%) が「冷え」と診断され、自覚症状については高い判別結果であった (交差確認 80.5 %、ROC=0.84,95%CI : 0.78 - 0.91,p&lt;.0001)。しかし「冷え」の症状の判別としては信頼性の低いスクリーニング方法であった。次に「冷え」群と血管機能評価項目の関係から、足指上腕血圧比(TBI,0.81)及び足指最高血 (Toe-SBP,87.5mmHg) がカットオフ値として得られた (TBI=0.0075*Toe-SBP+0.15,R2=0.829,p&lt;.001,ROC=0.98,95%CI : 0.98 - 1.0,p&lt;.001)。</p> <p><b>【結論】</b> 主観的評価である「冷え」に関するアンケートと客観的評価項目 TBI・Toe-SBP を組み合わせることによって症状の定量化の可能性が示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。